

萩原乙彦筆写『志士清談』について

内 村 和 至

はじめに

先般、ある古書肆の目録から「萩原乙彦『志士清談』と記載のある本を手に入れた。私はここ数十年、萩原乙彦（文政八―明治一九（一八二六―一八八六））を追ってきたが、初めて聞く書名である。手元に届いてみると、これは南条八郎の『志士清談』を乙彦が摘記筆写して、論評を加えたものだった。蔵印には「只誠蔵」とあり（図版Ⅰ）、関根只誠の旧蔵書である。そんな素性の正しい写本がどうして私の手に転がり込んできたものか、古書の行方も人生同様に変転極まりないものではある。

それはともあれ、旗本次男坊崩れの戯作者乙彦にして『志士清談』という武張ったものを筆写していたことは、いささか意外の感を抱かされた。しかし、これも乙彦の一面だったには違いない。この『志士清談』の筆写年は不明だが、署名に「白峰萩原乙彦」とあるので、乙彦が萩原秋巖の養子になった慶応年間（一八六五―一八六八）以降であることは確かである。乙彦は安政期（一八五四―一八六〇）に鈴亭谷峨・梅暮里谷峨の名で幼童向けの『英雄武者ぶるい篋』、『組打くみうち図会』、『和漢武者相撲』といった絵入本を出している。このような絵入本は時勢柄、他の戯作者達も数多く制作してはいるが、旗本出の乙彦の場合、そこにはいささかなりとも武士の矜持が働いて

いたのであろう。

乙彦はその女出入りが取り上げられることが多い⁽³⁾。そんな乙彦のありさまから、楠本憲吉は、その乙彦伝を「モダン乙彦論」と題した⁽⁴⁾。確かに乙彦には一見「モダン」に見えるところがないではない。旗本崩れの戯作者・俳諧師だった乙彦は、風流人・遊び人ではあったろう。しかし、その裏には抜きがたく旗本武士の氣質が底流していたように思われる。山内容堂や勝海舟の例を見ても、女出入りと武士氣質が別段矛盾するものでもないことは明白だろう。それが現在の倫理観からみて芳しいものには見えないにしても、その時代はそういうものだったとしか言いようがない。

そのような思いから、私は以前、乙彦を『腕くらべ』の木谷老人に擬えたことがある⁽⁵⁾。木谷は、旗本の嫡子として生まれ、幕府瓦解の折に講釈師となり、その容姿を見せられて芸者屋「尾花屋」の主人に収まった人物である。荷風は木谷を、「自分だけでは心底あきらめて世をも自分をもすつかり茶にしてゐるつもりであるが、知らず／＼昔の氣位と性癖を現はす」人物と描き出している⁽⁶⁾。乙彦も旗本武士の「氣位と性癖」が抜けきらなかつたのであろう。乙彦の『志士清談』筆写本には、そんな

乙彦の一面が現れているように思われるのである。ここでは、乙彦筆写の『志士清談』を材料として、乙彦のその精神的位相をうかがってみることにしたい。

(1) 乙彦が萩原秋巖の養子に入った年は確定できていないが、著作など他の傍証から慶応年間であることは間違いない。なお、乙彦には写本『紅緑日記』二冊（山梨県博物館蔵博）があり、筆記時期は「慶応2〜4か明治1」とされている。私は未調査だが、これに養子縁組記事があるのではないかと期待される。

(2) 鈴亭谷巖作／一勇斎国芳画『英雄武者筈』（安政四年刊 平林収文堂）、鈴亭谷巖作／玉蘭貞秀画『組打図絵』全六編（安政三年）、版元未詳、梅暮里谷巖作／歌川貞秀画『和漢武者相撲』全五編（安政期か？ 版元未詳）。三作とも架蔵本に拠るが、『組打図会』は五編を欠く。

(3) 拙稿「萩原乙彦の人物像——二人の女をめぐって——」『文芸研究』一一三、二〇一一・三。

(4) 楠本憲吉「モダン乙彦論」『俳句研究』第三二卷九号 一九六五・九。なお、乙彦の女出入りについての基礎資料は、三田村鳶魚『足のむく儘』所収の「根津宮永町」、『三田村鳶魚全集』第八巻 中央公論社 一九七五。原刊大正一〇年（一九二一）である。それら記事の再吟味は注(3)拙稿で行った。

(5) 拙稿「萩原乙彦の俳諧活動について」『文芸研究』一一五、二〇一一・一〇。

(6) 永井荷風『腕くらべ』『荷風全集』第六巻 岩波書店
一九六二、二五〇頁。

一 南條八郎著『志士清談』

まず始めに南條八郎著『志士清談』について確認しておく。『志士清談』は、その別名を『続武将感状記』と呼ばれてきた(後述)。このことからもうかがえるように、『志士清談』は熊沢淡庵『武将感状記』の続編と云うべき書である。淡庵の『武将感状記』一〇巻一〇冊は別名を『近世正説／碎玉話』(角書および内題)と言い、江戸期の隠れたベストセラーである。初板の正徳六年(一七二六)以降も板を重ね、写本も数多く、活字本も何種類かあって、近代に至るまで広く読まれてきた。内容は所謂「武辺話」で、史実としては疑わしい記事も多いとされるが、そこには武士倫理への強い信念もしくは憧憬が漲っている。本書が武士道文献として広く知られる所以である。

熊沢淡庵(一六二九—一六九二)、名は正興まさかみ、通称権八郎後に伊太夫、淡庵はその号、妻は熊沢蕃山の妹方で

ある。⁽²⁾寛永六年(一六二九)、平戸に生まれ、熊沢蕃山に学び、平戸藩松浦鎮信まつらしげのぶに仕え、慶安元年(一六四八)二〇歳の時に松浦家を辞し、慶安三年(一六五〇)一月から岡山藩池田光政・綱政に仕えた。『熊沢氏家系』に拠れば、淡庵は岡山藩に仕えを代えたのを期に通称を平九郎から権八郎に改名している。また、元禄三年(一六九〇)には名字を南條に改姓し、翌元禄四年(一六九一)四月三日、江戸で没した。享年六三。『志士清談』の著者南條八郎は、この淡庵の嫡子、つまり、南條家の二代目である。

南條八郎(一六五五—一七二四)、名は正修まさおみ。父淡庵の没後、家督を継ぎ、享保三年(一七一八)まで綱政に仕え、その後、致仕しようである。⁽¹⁾享保九年(一七二四)七月十九日没。享年七〇。三代正路は元禄一七年(一七〇四)から知行を受けているので、親子ともに綱政に仕えたのである。なお、正路は正修の没した享保九年(一七二四)に熊沢姓に復姓している。南條八郎が熊沢八郎とも呼ばれるのは、父熊沢正興の南條姓への改姓、子息正路の熊沢姓への復姓に拠ってのことだが、当人の代としては南條姓ということになる。

正修の著書としては、『志士清談』『南條八郎書上』

『武教全書』の三点が知られている。⁵⁾これらは全て自筆本、写本であり、公刊されたものはない。『南条八郎書上』は土木建築関係の、『武教全書』は山鹿素行『武教全書』の筆写本らしい。⁶⁾この二点は孤本だが、『志士清談』は写本としてある程度は流布したようである。⁷⁾活字化されたのは、近藤瓶城(へいしやう、一八三二—一九〇二)の編纂した『史籍集覽』第一卷(明治一六年(一八八四)二月刊)においてだが、『改定史籍集覽』第一卷(明治三四年(一九〇一—一〇月刊)の瓶城の識語には、「此書前板には統武将感状記と題したりしもこたひは近藤守重翁の説に従ひ志士清談と題を改めたり」とある。⁸⁾近藤守重(二七七一—一八二九)は蝦夷地探検で知られる近藤重蔵のことだが、この近藤の識語を有する写本のいづれかが、『改訂史籍集覽』本の底本だったわけである。⁹⁾近藤の識語には(判読の便のため句読点を施す)、

世二碎玉話ト云ヘル一書アリ。一名武将感状記ト云。熊澤了介カ著ストコロト云。誤レリ。備藩二吉田源之丞ト云モノアリ。弓馬ヲ善ス。ソノ家ニ古ク持伝ヘシ古葛籠アリ。ソノ中ニ古キ物語ヲ紙ノ切レ反故ノウラニ書アツメテ数卷アリシヲ、熊澤伊大夫ト云

者取出シ、文ヲ綴リ清書シテ書冊ヲナシ碎玉話ト題ス。ソノ後又ソノ古葛籠ノ底ヨリ数卷ノ物語ノ残りアリシヲ南條八郎ト云モノ見出シテ一冊ヲツヅリ志士清談ト題ス。八郎ハ了介カ孫ナリト云。コノ話池田山城守ノ臣森田勘九郎ニ聞テ西山翁ノトコロニ記シ置モノ也。ノ寛政五年春二月 近藤守重誌

とある。¹⁰⁾『武将感状記』は熊沢了介(りやうかい)即ち蕃山の書という説も行われていたが、近藤はこれは熊沢伊太夫即ち淡庵の著であるとし、その補遺が南条八郎『志士清談』だと明解に指摘している。辞典類では『志士清談』の一名を『統武将感状記』と記載するが、『志士清談』が写本で流布している間、これが『統武将感状記』と呼ばれていたことを私は確認できなかった。なお、瓶城は、改定史籍集覽本の冒頭に「志士清談一名統武将感状記名統碎玉話」とも記しているが、¹¹⁾『志士清談』が『統碎玉話』と呼ばれた例も見いだすことができなかった。つまり、『志士清談』を『統武将感状記』および『統碎玉話』と命名したのは瓶城が史籍集覽本で行ったことであり、それ以前には行われていたものではなかったようである。¹²⁾それに因んで言えば、『志士清談』の別書名とされる

『続武将感状記』と同名の刊本がある。編者は栗原信充（一七九四—一八七〇）。栗原は屋代弘賢『古今要覧』編纂の補助者として知られ、幕末期の武家故実家として多数の著書を持っている。¹³『続武将感状記』の刊年は前巻五冊が天保一四年（一八四三）、後巻五冊が同一五年（一八四四）である。この本は角書に「中古正説／碎玉話」とあるが、これは『武将感状記』の別書名『近世正説／碎玉話』の「近世」を「中古」に変えたものである。これは淡庵の「近世」に対して「中古」、即ち、「近世」以前の武家の話を収録したもので、『武将感状記』の拾遺をめざした著作と言える。栗原は『続武将感状記』序に、若い頃、柴野栗山から「諸生文ヲ作ルコトヲ学バント欲セバ則姑ク須ク淡庵ノ碎玉話ヲ撮リ以テ辞ヲ修スルコトヲ要スベシ」と教えられたと言っている。¹⁴栗原は淡庵への敬意から『続武将感状記』を著したわけである。

一方、『志士清談』には言及がない。『志士清談』は写本でもあり、栗原の視野には入っていないなかったらしい。

それはともあれ、乙彦が『志士清談』の写本を手に入れた、ことさらにこれを摘記して、コメントを加えたことは、その思い入れの程度はともかく、乙彦が武辺話に興味関心を抱いていたことを示している。前節に触れたよ

うに、乙彦は安政期に幼童向けの武者絵本を何点か出しているが、『武将感状記』のような武辺話集は種本として不可欠だったろう。しかし、乙彦の興味のあり方は、武辺話の種本探しというだけにはとどまらなかったように思われる。それを示しているのが乙彦筆写の『志士清談』だと私は考える。

次節から乙彦筆写『志士清談』の書誌や構成について検討を加えながら、乙彦が『志士清談』を筆写した背景について考察していきたい。

(1) 初板以降、享保六・同九・文政六・同八・元治元などの諸板のほか、刊年不明本も多数ある。また、活字本としては、『いてふ本刊行会』・続帝国文庫『常山紀談』・袖珍本刊行会・昭和版帝国文庫『常山紀談』・『武士道全書』第八巻などがある。

(2) 『日本人名大辞典』（講談社 二〇〇一・一二）「熊沢淡庵」の項。および、井上通泰「熊沢蕃山」三六頁『井上通泰文集』島津書房 一九九五・六）。

(3) 岡山県立図書館蔵「熊沢氏家系」は全文デジタルデータが公開されている（<http://digioakalibnet.pref.oka.yama.jp/mmlhp/kyodo/waso/0002115578/pageframe.htm>）。なお、その書誌記事には「本書は、明治三五年（一九〇二）一月五日、眼科医で、吉備史談会の発起

人井上通泰(一八六六一一九四一)が、郷土史研究家塚本吉彦(一八三九—一九一六)が所蔵する熊沢蕃山関係の蔵書を書き写したものである。紀州熊沢氏・尾州熊沢氏の系譜(「南條熊沢氏系譜」)、和氣郡伊里荘蕃山村の事跡(南條八郎正修著「蕃山村墳墓記」)、巨勢貞軒著「蕃山先生実録」、南條正修の孫直方の「熊沢氏家記」や聞書・系譜が収められている。よび(<http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/detail.jp/id/Kyo/M2004093020044142867>)。

- (4) 注(2)前掲書。および、「熊沢家八代の知行宛状・扶持書」案内(<http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/eol/detail.jp/kyo>)に拠る。
- (5) 『国書人名辞典』第四卷「南條正修」の項(岩波書店一九九八・一一)、および、国文学研究資料館データベース(http://basel.nijia.jp/info/lib/meta_pub/CsvDefault.exe)の検索に拠る。
- (6) 『南条八郎書上』は岡山大学「池田家文庫」に蔵され、「土木建築(雑)」に分類されている。『武教全書』は国文学研究資料館「山鹿文庫」の蔵本である(注(5)前掲データベース検索。および、中嶋英介編「国文学研究資料館特別コレクション」山鹿文庫目録〈国文学研究資料館二〇一九・四〉)。なお、八郎には、注(3)前掲「熊沢氏家系」中に「蕃山村墳墓記」(七一―一五コマ・六オ―一二ウ)がある。
- (7) 注(5)前掲データベースに拠れば、『志士清談』写本は、以下二件の所蔵が確認できる。内閣・金沢大・東

大・東大史料・東北大狩野・彰考・尊経・旧安田・岡山県・茨城大菅・金沢大北条・姫路文学金井。

- (8) 復刻版『改訂史籍集覧』(臨川書店 一九八四・二)一〇〇頁。
- (9) 近藤の識語を有する『志士清談』としては、内閣文庫本(<https://www.digital.archives.go.jp/>)、茨城大学附属図書館本(<https://kotenseki.nijia.jp/biblio/100305954/viewer/1>)の二種に全文テキストデータが備わっている。
- (10) 注(8)同書、一頁。この識語は、注(9)前掲データ二種ともに巻末に付されている。
- (11) 熊沢正興が伊大夫と呼ばれていたことは、注(3)前掲「熊沢氏家系」に記載されている(二丁表)。
- (12) 『朝日／日本歴史人物事典』(一九九四・一一 朝日新聞社)「栗原信充」の項。栗原の『続武将感状記』のデジタルデータはいくつか公開されているが、人文学オープンデータ共同利用センターの「日本古典籍データベース」所収データ(<http://codh.rois.ac.jp/pmit/book/200019198/>)が最も精細である。
- (13) 注(8)同書、二頁。
- (14) 注(12)前掲「日本古典籍データセット」本、一丁表。

二 乙彦筆写『志士清談』書誌

架蔵の乙彦筆写本は六冊からなる。まずは、その書誌を記しておくこととする。

卷冊 六冊

判型 半紙本。二二・七糎×一五・二糎。

綴じ こより綴じ。

構成 ①第一冊 冒頭に「志士清談卷之式／熊沢先生

遺稿 白峰萩原乙彦補録」とある（**図版I**）。

全一九丁・墨付き一九丁

②第二冊 初丁欄外に「一ノツヽキ」とある。

全八丁・墨付き七丁半。

③第三冊 冒頭に「志士清談卷之三」とある。

全一五丁・墨付き一五丁。

④第四冊 初丁欄外に「三之卷」とある。全一

五丁・墨付き一四丁半

⑤第五冊 冒頭に「志士清談卷之四」とある。

全一〇丁・墨付き一〇丁。

⑥第六冊 卷号記事はないが、第五冊から文章

が続く。全一八丁・墨付き六丁。

本文 半丁一行。このほか、墨消し・傍書・朱書き・

欄外書入などがある（**図版II**）。

写年 第一冊冒頭署名に「白峰萩原乙彦補録」とある

ので、筆写時期は、乙彦が書家萩原秋巖の養子となつた慶応年間（一八六五—一八六八）以降。

蔵印 各冊初丁ノド下、陽刻・二重枠・行書体「只誠

蔵」（**図版I**）。只誠の蔵印としてよく知られたもの¹⁾。

第一冊冒頭に「志士清談卷之式／熊沢先生遺稿」とあるように、乙彦は著者を「熊沢先生」としている。前節に『武将感状記』の著者が熊沢蕃山と誤伝されていたことを述べておいたが、乙彦もそう考えていたらしい。それゆえ、乙彦は『志士清談』を『武将感状記』の続編と見て「熊沢先生遺稿」としたのであろう。

この六冊本は「卷之二」を欠くが、元来は具備していたはずである。第二冊「一ノツヽキ」と第三冊「志士清談卷之三」の間には、史籍集覧本『志士清談』の項目中、第五七から第八四まで二八項目分の記事がない（表I・II）。乙彦本は摘録ではあるが、二八項目がまとめて

抜け落ちてゐるのは不自然である。やはり原本には「巻之二」が存在していたと見るべきだろう。

なお、第一冊「志士清談卷之一」と第二冊「一ノツ、キ」の間も、史籍集覧本の第一八から第四六まで三〇項目分の記事がないので（表Ⅰ・Ⅱ）、あるいは、第一冊と第二冊の間に冊がもう一冊あったのかもしれない。いずれにせよ、架蔵の六冊本が完本でないことは確かである。

また、第六冊は全一六丁あるが、墨付きは六丁しかなく、あとは空白のままである。史籍集覧本は全部で一六八項目ほどあるが、乙彦が採録しているのはその第一四一項目までで、残り二八項目分ほどがない（表Ⅰ・Ⅱ）。第六冊の空白丁が多いところを見るに、おそらく乙彦はまだ筆写を続けるつもりだったのだろうが、ここで中断してしまつたらしい。

筆写態度を見ると、「卷之式」開始当初こそ丁寧に写されているが、次第にやや粗くなつてゐる。特に細字の書き込みは判読困難な箇所が多い。それでも、乙彦が『志士清談』全一六八項目中の五八項目を摘録し、長短はあるにしても、その一六項目ほどに評を加えているのは、乙彦も勤めたりと言ふべきであらう。

既に触れたように、乙彦が書家萩原秋巖の養子となつたのは慶応年中と考えられるので、起筆時期は慶応以降である。また、乙彦は署名に「白峰」号を用いているが、他の使用例を私は知らない。おそらくは一時の号に過ぎなかつたのであらう。このように、筆写時期が慶応以降と考えられることと、「白峰」号が他の時期に見られないことからして、私は乙彦筆写本は慶応年中のものではないかと推定している。

その推定のもうひとつの理由としては、この時期、乙彦に作がないことがあげられる。乙彦は幕末期に梅暮里谷峨（二世）・歌沢能六斎を名乗り種々雑多な作をなしているが、刊年が確認できる最下限は文久二年（一八六二）の『大津糸ぶし落葉籠』（歌沢能六斎編 品川屋久助板〈筆者原本未見〉）で、以後、文久三年から慶応四年（一八六三—一八六八）までの六年間には刊行が確認できる作がない²⁾。もちろん、この時期の刊年未詳の片々たる戯作はいくらでもあるから、乙彦に作が全くなかつたと断定するつもりはない。しかし、幕府衰亡の動乱期に戯作をこれまでどおりに刊行できたとも思われぬ。それゆえ、私は乙彦が秋巖の養子となつたについては、戯作者としての生活に窮したためであつたのではなから

うかと思っっている。つまり、乙彦が『志士清談』の筆写に取り組んだについては、戯作や歌謡本などの仕事がなく、時間があつたからという理由もあつたように想像するのである。

私の推定の当否はしばらくおくが、乙彦は秋巖の養子となつてから、養父の体面を憚つて戯作から手を引き、明治初年からは俳諧を表芸とすることになつた。^③ 当時の俳諧師の社会的地位から言えば、次男坊とは言え旗本武士が俳諧師になるには、かなりの覚悟が必要だつたらう。いくら風流人とはいえ、乙彦のプライドが傷つかなかつたはずはない。乙彦が萩原姓になつてから用いた印に易の「坎巽」の象を用いたものがある。「坎巽」は六四卦第四八「水風井」に当たる。「易経」には、

井は、邑を改めて井を改めず、喪うなく得るなし、往来井を井とす、汔んど至らんとして、またいまだ井に繻せず。その瓶を羸る。凶なり。

とある。^④ 「邑を改めて井を改めず」とは、「村は変わっていても、井戸は変らずそこにある」といった意味であろう。また、乙彦は明治期の著作に「水風井」をもじつ

た「水風星」印を用い、「水風星」を名乗つてもいる。^⑤

私はそこに養子となつた（＝邑を改めた）乙彦の秘かな覚悟が表明されているような気がしてならないのである。

また、慶応年間には幕府の瓦解が目前に迫り、武士階級が激しく動揺していた時期だつたと言える。そのような中で武士階級から離脱した乙彦にとつて、『志士清談』の筆写は、旗本武士に出自を持つ自らの自己確認の意味もあつたのではなからうか。その意味において、乙彦が『志士清談』を筆写したのは、乙彦なりの武士への追懐だつたように私には思われるのである。

なお、この本の旧蔵者、関根只誠は文政八年（一八二五）生まれで、乙彦と同年である。乙彦は明治一九年（一八八六）に没しており、只誠はその七年後の明治二六年（一八九三）に没している。乙彦は只誠の『名人忌辰録』に収録されているが、この二人は同時代人であるだけでなく、戯作界や梨園に関係が深かつたから、交友の深淺はともかく、お互いに顔見知りだつたには違いない。乙彦筆写『志士清談』が、いつごろどのような経緯で只誠の蔵書となつたかは知りたいが、稀代の蔵書家だつた只誠が『志士清談』写本というだけでこれを入手したとは思われない。やはり只誠はこれが乙彦の筆写本

だったからこそ架蔵したのであろう。

この只誠旧蔵書が今頃になって私の手元に転がり込んできたのは、乙彦筆写本がさほど価値あるものと見なされず、只誠の他の旧蔵書のように公共図書館に収められることもなく、古書市場を転々としてきたせいだろう。

私はたまたま乙彦に巡り会って、半ば成り行きで乙彦を追いかけてきたが、この筆写本に出くわしたのもまた奇遇と言わねばならない。

- (1) 関根只誠の蔵印は、国文学研究資料館の「蔵書印データベース」(http://basel.nijiac.jp/info/lib/meta_pub/G0038791ZSD)で確認できる。
- (2) 乙彦の戯作については、拙稿「萩原乙彦の戯作類について」『文芸研究』一一六・二〇二・二〇三に論じたが、大津絵節・歌沢関係については原本の所在が不明なものが多く、調査結果をまとめるまでに至っていない。
- (3) 乙彦の俳諧活動は、「はじめに」注(5)前掲拙稿参照。
- (4) 拙稿「蔵印雑話」『文芸研究』一三二号・二〇一七・一)。
- (5) 高田眞治・後藤基巳訳『易経』上下(岩波文庫 一九六九・六)。
- (6) 注(4)拙稿参照。乙彦は『对梅宇日涉』第四一六編(万屋庄助刊 明治三年)に「水風星蕉華外史」を、『月儀要文』(文永堂 明治六年)附録に「水風星乙彦」を

名乗っている。

- (7) 『名人忌辰録』(ゆまに書房 一九七七・一一)には、「萩原乙彦 本姓森語 一郎十時庵の門に入り対梅居乙彦と云ふ亦二世梅暮里谷峨と改む後萩原秋巖の養子と成る小説家にして俳諧を能くす明治十九年二月廿八日甲州矢村にて歿す歳六十一」とある。傍線箇所は誤伝・誤記である。詳しくは「はじめに」注(5)前掲拙稿参照。

三 乙彦筆写『志士清談』の構成と内容

『志士清談』一六八項目中、乙彦が筆写したのは五八項目で、その三割五分ほどに当たる。また、表Iに見るとおり、乙彦が採録した項目はほとんど史籍集覧本『志士清談』の項目順に沿っている。『志士清談』の写本系統については何の知見も持たないが、それほど広く行われた写本でもなさそうなので、異本が数多くあったとも思えない。乙彦の依拠した本も本文は史籍集覧本と同系統のものであったと考えてよいだろう。

なお、写本として当然のことではあるが、乙彦本と史籍集覧本では本文に異同がある。例えば、本文の末尾の省略である。乙彦本二三「山脇源大夫強勇」・史籍集覧本九一「山脇源大夫重信ハ」(表I・II)の末尾はこの

ようになってゐる（句読点を施して引用。傍線部が乙彦本の省略部分）。

……其子孫世々池田家ノ臣タリ。河原林越後守治冬ハ重信カ旧友ナリ。秀吉公會テ信長公ノ使トシテ荒木カ在岡ノ城ニ至リシ時、治冬ニ賜ヒタル三條吉廣ノ短刀今猶山脇ノ家ニ存セリ。（史籍集覽本・五五頁）

このような例は、乙彦本二五「加藤清正ノ忠勇三事ヲ諾セズ」・史籍集覽本九三「加藤肥後守清正領国ヨリ」（表Ⅰ・Ⅱ）にもあるが、これらは原本がそうであったというより、乙彦が補足事項と見て筆写しなかったものと思われる。なお、乙彦が依拠した原本が不明であるため、史籍集覽本との校異表を作成するところまでは踏み込んでいないが、用字や語句などの細部的な異同は無数にあるはずである。

そのほかでやや目を引くのは、乙彦本と史籍集覽本で項目の前後が入れ替わっている箇所が三箇所あることである（表Ⅰ）。単純なものから見ておけば、一つ目は、乙彦本一八・一九・二〇・二一が、史籍集覽本では八五・

八一・八二・八六という順になっている箇所。二つ目は、乙彦本四八・四九が、史籍集覽本では一三一・一三〇の順になっている箇所である。これらは近接した項目で、筆写の際の手順前後か、初めは省こうとしたが思い直して写したかなのであろう。ただし、三番目のものだけが奇妙なのである。それは、乙彦本の第一冊第一項目が史籍集覽本では最も末尾の第一六八項目だという点である。乙彦が依拠した原本の構成がそのようなになっていたのか、いささか解せない気がする。あるいは、乙彦が筆写の完成を期して、わざと最終項目を冒頭に持ってきたのかもしれない。突飛な想像かもしれないが、そういう心理も全くないことでもないだろうと私は思う。

その詮索はともかく、乙彦本の第一冊は、筆写当初で方針が定まっていなかったものか、冒頭記事には「石谷土人之語其ノ心ハ常ニ清潔タル事」と見出しが付されているが、第二項目以降は見出しがない。そして、第二項目以降は後から行間や欄外に見出しが書き入れられている。そう思ってみると第一項目の見出しも墨色が異なるので、あとから記入されたものようである（**図版Ⅰ**）。『志士清談』にはもともと見出しがなく、それぞれの項目冒頭に「一」を付して記事が始まるので、乙彦も

当初は見出しなしで筆写し始めたのだろう。しかし、見出しがないと記事の検索など何かと不便である。乙彦は第一冊の筆写終了後にそのことに気付き、後から行間や欄外に見出しを書き加えたものと思われる。第二冊以降は方針が定まったと見えて、それぞれの項目に見出しが付されている(表Ⅰ)。

乙彦が採録した全五八項目は、『志士清談』中で乙彦が興味を持った項目だったろうことは確かだが、もともと『志士清談』は武辺話の雑多な集積で、そこに戦国時代の話柄が多いのは自然の成り行きである。そのため、乙彦が採録した項目も結局はその域を出ず、項目の選択にそれほど有意な傾向を読み取ることはできない。ただ、乙彦がコメントを付した項目からは、乙彦が何に興味関心を抱いていたかはある程度読み取れるだろう。それで、ここでは乙彦がコメントを付した項目に絞って検討してみたい。

乙彦がコメントを付している項目は表Ⅲにまとめておいた。その項目数は全五八項目中、ほぼ三割弱の六一項目にある。行間や欄外には書籍名や語句の注釈などの記入もあるが、採用したのは乙彦のコメントと考えられるものに限った。基本的には、本文のあとに一字下げで

「乙彦曰ク……」とあるもの、また、それがない場合でも一字下げになっていてコメントであることが明白なもの、行間や欄外に「乙彦曰ク」とあるものなどを拾い出した。分量的には、数丁に渡るものもあれば、数行だけのものもある。欄外書入もあるが、これは細字で墨色の薄い箇所もあり、正直なところ私にはしかと判読できなかった。

乙彦のコメントを分量の面から分類しておけば、おおよそ、一〜五行程度のものが五項目(八・一一・一三・二五・五〇)、一〇〜一三行程度のものが四項目(二三・三〇・四三・四五)、一丁〜一丁半程度のものが四項目(三・一九・二八・四九)、一丁以上のものが三項目(六・七・五八)ある(表Ⅲ)。もちろん、これはあくまでも分量による分類であって、内容による分類ではない。なお、筆写開始当初には長いコメントが目立っているが、次第に簡素なものになっていく傾向がある。無理からぬことではあるが、これは当初の意気込みが次第に薄れていったからであろう。既に触れたが、筆跡も開始当初は比較的丁寧であるが、だんだん手早く写した感じになっている。

乙彦のコメントは、原本が武辺話の摘記である以上、

その人物評が中心になりそうなものだが、実は人物評はあまり多くはない。最も短い例を示しておく。乙彦本八「箱根ノ番士刃ノ血臭ヲ識ルコト」(史籍集覧本二二)は、越後高田の城主松平越後守の家臣が江戸で人を殺し、刀を研ぎ直した上で箱根の関所を越えようとした時、箱根の番士が鞘に血の臭いを察して押し返したという話である、乙彦はこれに、

乙彦曰、両士トモ有繫ニ凡庸ノ人物ニハ非ガ、其姓名ノ伝ラスハ惜シム可シ(第一冊一六オ、フリガナは引用者)

とコメントしている。確かに武辺話は忠勇・機略などが話柄となるので、コメントは基本的にそれを賛嘆するほかはなく、あまり変化の付けようがないとも言える。そのため、乙彦のコメントは、その人物の経歴を敷衍したものにちである。

例えば、乙彦本三「輝政朝臣不虞ノ備忽ナラサルコト」(史籍集覧本六)のコメントでは、

乙彦曰ク、輝政卿ハ(幼名ノ古新)紀伊守信輝入道

勝入ノ二男ナリ。其先撰津守頼光朝臣五代ノ苗胤瀧口泰政ノ子孫、撰津国ノ住人池田九郎教信(イニノ依)河内ノ楠正行ガ遺腹ノ子ヲ養フテ池田十郎教正ト名ノラシ、后兵庫助ト号シテ足利三代ノ將軍鹿苑院義満ニ仕フ……(第一冊五オ、〔〕内は二行割り。「イニ」は「異本二」の意)

といったように、清政の先祖のことを記し、以下、清政の禄高などを克明に記しているが、正直、記事として大しておもしろいものではない。

このように人物の経歴を敷衍したものの以外で、乙彦のコメントとして目立つのは、考証的な記事である。例えば、乙彦本六では板倉勝重・吉岡憲法の経歴記事のあとに、申樂の考証が付されており、乙彦本七では舟戸九右衛門の記事のあとに牛王の考証がある。その他、乙彦本一九には弁慶考証、二三には与力考証、二八には一向宗考証、三〇には馬標考証がある。なお、書式の点からコメントとしては取らなかつたが、乙彦本一〇は陣羽織考証で、これは前条九の「明知左馬助結城清潔ノコト」記事に関連してはいるが、ほぼ独立した考証記事となっている。

そのような考証記事の中でも、乙彦本五八に付された考証は、『志士清談』の記事とはほぼ無関係とさえ言える。『志士清談』の記事は、大江（毛利）元就家臣の荒源三郎が民を悩ます水虎（河童）を捕らえたという源三郎の豪胆さを記したものだ^①が、乙彦はこれに水虎考証を付している。

乙彦曰、カツバハ本草綱目蟲部湿生類溪鬼虫ノ附録
二曰、水虎時珍曰襄沔記云中廬縣有^②涑水注沔中二
有物如^③三四歲小兒一甲如鯪鯉射不能入コト秋曝^④沙
上^⑤膝頭似^⑥虎掌瓜常没^⑦水出^⑧膝示^⑨人小兒弄之便
咬^⑩人云々。本草啓蒙ニ此物ヲ指テ本邦ノカツバト
ス。其書二曰、水虎一名水唐（通雅）水廬（同上）
諸州皆アリ。濃州及比筑後柳川辺尤多シ……。（第
六冊四ウ）

乙彦は李時珍『本草綱目』を引き、その後小野蘭山『本草綱目啓蒙』を引用しているが、この引用が長々と続き、またその後には貝原益軒『大和本草』をも引用しており、その分量は二丁八行に及ぶのである。乙彦の文献博搜の労はそれとしても、このような考証は、乙彦の

関心が人物評よりも事物に向いていたことを示している。また、それが極めてブッキッシュであることもその特徴である。

これは乙彦の著作全般に渡る特徴と言うべきで、それは明治七年（一八七四）に乙彦が刊行した『東京開化繁昌誌』初・二編にも現れている^①。石川巖は、本書の記事の傾向について、

本書の特色は故事来歴沿革の細叙にあるが、単に開化繁昌記といふ上からは却つて無くもがなで、それよりは寧ろ當代の世相や風俗を細写して欲しかった

と評している^②。この「故事来歴沿革の細叙」は、『志士清談』のコメントに共通する性格であり、そこに乙彦の興味関心があったことを示している。この態度は江戸期の考証随筆を継ぐものとも言えるが、より大きな観点から見れば、これは文書の教養人の姿である。それはM・ヴェーバーが言ったように、儒教的知識人のあり方と言えるだろう^③。その意味においても、乙彦は江戸時代の伝統を保持していたと言える。

それはともかくとするが、この水虎考証を以て、乙彦

表I 乙彦筆写本『志士清談』項目

※「評」欄は乙彦の評があるもの、
 ※「史」欄は『史籍集覽』本の項目。別掲「改定史籍集覽本『志士清談』項目」表参照。
 ※△印は行間および欄外書入

② 一ノ二		① 一										冊					
No.		15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
	見出し	山崎半左衛門武勇ノ器タルコト	木曾義仲ノ評	左衛門督忠継朝臣若年ノ勝レ者ト称セラル	大坂一乱ノ前法ニ愜者ハ之ヲ称スル事	花木大膳忠勇	×	△明知左馬助結城清潔ノコト	△箱根ノ番士刃ノ血臭ヲ識ルコト	△舟戸久左衛門信ヲ示シテ正家ヲ降ス	△太田忠兵衛吉岡憲法ヲ撃コト	△三太夫明ニ趣意ヲ述テ小山田ヲ討コト	△武士ノ不覚悟ヲ古老嘆息スルコト	△輝政朝臣不虞ノ備忽ナラザルコト	△泰景家僕ノ一命ヲ惜ミテ所領ヲ辞スルコト	△石谷土人ノ語其ノ心ハ常ニ清潔タル事	
	記事冒頭	松平筑前守光高	或曰ク名将義経正成	松平左衛門督忠継	大坂一乱ノ前	堀田加賀守正盛ガ兄扈從花木大膳	陣羽織春湊浪語ニ	明知左馬助秀俊	越後高田ノ城主松平越後守	長東大藏大輔正家	吉岡憲法	小山田兵衛尉	大坂陣ニ	源輝政朝臣	天野三郎兵衛泰景	石谷長門入道土人	
	丁	二行墨消し	四ウー五ウ	三オー四ウ	二オー三オ	一オー二オ	一九ウ	一六オー一九オ	一四ウー一六オ	一〇ウー一四ウ	七ウー一〇ウ	六ウー七ウ	六ウ	四オー六オ	一オー四オ	一オ	
	評	×	×	○	×	○	×	×	○	○	○	×	×	○	×	×	
	史籍	51	50	49	48	47	×	17	12	11	10	9	7	6	3	168	

④ 三ノ二			③ 三															冊
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	No.
柴田角兵衛津口ヲ騒ス	蒲生氏郷伏兵ヲ察シテ懼レズ	村田七太夫鍬砲手練	毛受勝助代主戦死	秀吉察智盛政ガ詭策ヲ止ム	×	信玄深慮謀ニ乗ズ	久野四兵衛地割速功	加藤清正ノ忠勇三事ヲ諾セズ	覇者ノ議論	山脇源大夫強勇	板倉重矩家士ノ過惡ヲ教諭ス	三河備中ノ人気	上田宗古刀槍術戒語	今弁慶甚右衛門ノ事	那波道円大名風ヲ談ズ	瀧川出雲関ヶ原勇戦	(前項ニ行墨消しに続く)	見出し
南都ノ奉行中坊飛驒守	信雄秀吉和議調ヒシカドモ	秀吉信雄ト合戦ノトキ	柴田勝家佐久間盛政カ敗ヲ聞ケトモ	賤嶽ニ於テ中川瀬兵衛清秀	織田信長本願寺門跡	味方原ノ戦ヒハ	久野四兵衛ハ	加藤肥後守清正領国ヨリ	或曰信長公ノ叡山ヲ	山脇源大夫重信ハ	板倉内膳正重矩ハ仁義ニ	板倉周防守重宗ノ曰	上田宗古ハ浅野家ノ長臣	金子惣左衛門乗馬ノ芸ヲ	紀伊大納言頼宣卿那波道円ヲ召テ	瀧川一益ノ末子瀧川出雲	松平肥前守利常朝臣	記事冒頭
二オ―三オ	一ウ―二オ	一オ―一ウ	一四ウ―一五ウ	一四オ―一四ウ	一オ―一四オ	一〇オ―一〇ウ	九ウ―一〇オ	八オ―九ウ	八オ	七オ―七ウ	六オ―七オ	五ウ―六オ	五オ―五ウ	二オ―五オ	一オ―二オ	七ウ―八オ	六オ―七ウ	丁
×	×	×	○	×	○	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	評
107	106	105	104	103	98	97	95	93	92	91	88	86	82	81	85	56	52	史籍

⑤ 四															冊		
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	No.
野村祐勝単身橋上ニ敵兵ヲ退ク	荒木安芸守忠戦陣弱並平生ヨリ士ヲ勞ス	伊丹親興軍配至妙	池田三郎五郎軍配勝利	吉田一祐大力強勇	後藤基次軍術ニ熟ス附存命ノ説	高畑三河一日十三度ノ功名並戰場心得ノ答	大友義鎮善諫ヲ容ル	崎ノ城先登 佐伯雅常武備ノ為ニ田獵ヲ好ム並杉谷兄弟高	(同項目)	志津嶽七本鎗並三振太刀	(なし)	氏郷大量刺客ヲ宿ス	北畠信雄暗愚	棹郎十兵衛秀吉ヲ負フ	千石権兵衛九州ノ地理ヲ窺(ママ)	同人神木ヲ伐賊ヲ捕ウ	見出し
野村太郎兵衛祐勝	大永ノ比細川武蔵守高国入道	天文年間細川右京大夫晴元	細川澄元ノ武將池田三郎五郎	豊後白杵ニ吉田一祐ト云者アリ	後藤又兵衛基次カ父新左衛門ハ	佐伯紀伊守惟教アル城ヲ攻ル時	大友義鎮ノ五家老	天文年中朽綱下野親満大友家ニ反シテ	又志津嵩ノ三振太刀ト唱ルハ	賤ヶ嶽ノ戦ニ盛政敗ル、ニ及ビテ	関白秀次廿八歳文禄三年	伊達正宗ハジメ蒲生飛驒守氏郷ノ	北条氏政請降リテ小田原ノ城ヲ	小田原ノ役ニ九鬼大隅守喜隆	天正十三年秀吉千石権兵衛ヲ	柴田角兵衛カ南都ノ宅辺ニ	記事冒頭
四オ―四ウ	一オ―四オ	一三ウ―一五オ	一三オ―一三ウ	一二オ―一三オ	一〇ウ―一二オ	九ウ―一〇ウ	八ウ―九ウ	七ウ―八オ	七ウ	七オ―七ウ	六オ―七オ	五ウ―六オ	五オ―五ウ	四オ―四ウ	三ウ―四オ	三オ―三ウ	丁
○	○	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	評
132	130	131	128	127	126	123	121	120	119	118	116	114	113	112	109	108	史籍

表II 改定史籍集覽本『志士清談』項目

No.	頁	項目
10	6	吉岡憲法
9	5	小山田兵衛尉
8	5	鳥居主膳正
7	5	大坂陣二城中ヨリ
6	4	源輝政朝臣
5	4	西如清
4	4	権現尊君
3	2	天野三郎兵衛
2	2	春日市右衛門
1	2	樋口半四郎

No.	頁	項目
20	12	ク、リ頭巾
19	12	挾箱
18	11	美濃菩提ノ城主竹中半兵衛
17	9	明知左馬助秀俊
16	9	貫知行異説多シ
15	9	楊井隱岐守
14	8	石州浜田領ノ者
13	8	縄タラリト云事
12	7	越後高田ノ城主松平越後守
11	6	長東大蔵大輔正家

⑥ 四ノ二	No.	項目	記事冒頭	丁	評	史籍
58	58	荒元重水虎ヲ生捕	天文三年芸州吉田釜ヶ淵ニ	三オ―六ウ	○	141
57	57	大蔵新右衛門廉直	中村一氏ノ家士大蔵新右衛門	二オ―三オ	×	140
56	56	(前冊の続き)	……人ナルホドニ	一オ―二オ	×	139
55	55	(なし)	丹後宮津ノ城主京極丹後守高広	九ウ―一〇ウ	×	139
54	54	林田左文劍術手練並馬爪源右衛門友ヲ扱フ	松平筑前守忠之ニ家士林田左文	八オ―九ウ	×	138
53	53	前田利大志ヲ述テ閑ヲ娛ム	前田慶次郎利大ハ	七オ―八オ	×	137
52	52	豊太閤茶器ヲ請テ秋月主従ヲ安ンズ	秀吉島津征伐ノトキ	六オ―七オ	×	134
51	51	池田輝政一言ノ土井周防ガ武功ヲ祈ラス	池田輝政ノ家臣土井周防	四ウ―六オ	×	133
		見出し	記事冒頭	丁	評	史籍

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	No.
20	19	19	18	17	17	16	16	16	14	13	13	12	12	12	12	12	12	頁
台徳尊君ノ時極罪ノ者	安藝ニ木全知矩	毛利家ヨリ兵ヲ	柳田半介ハ	秀詮ノ先鋒松野主馬	陣屋ニ馬盜アリト	長政合渡ノ川越ニ	関原ノ役ニ黒田長政其臣	藤堂戦ヒ危カリシカバ	黒田孝高ノ臣	秀吉公播州所々ノ合戦ニ	森三左衛門	那須七騎	伊勢北畠ノ家ヲ	武蔵七党	板東八平氏	常ノ法ニハ	駿府ノ町人木ヲ以テ作ル器	項目

57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39
36	36	35	32	31	30	29	28	27	26	26	26	24	23	22	21	21	20	20
秦桐若	瀧川一益ノ末子	大坂夏陣ニ中村隼人	佃次郎兵衛十成	中村一学一忠	加賀中納言利常	松平筑前守光高	或曰古之名将義経正成	松平左衛門督忠継	大坂一乱ノ前	花木大膳	人ヲ殺シテ	京極若狭守忠高	備中都宇郡庭瀬ノ領主臣	松平武蔵守利隆朝臣	備前ノ国主少将光政朝臣	鈴木治兵衛ハ備中ノ	奥州二本松ノ城主	台徳尊君鷹狩ノ為ニ

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	No.
46	46	45	45	45	44	43	43	43	41	40	40	40	39	38	38	37	36	頁
丸毛兵庫カ弟春日久兵衛	毛利元就芸州佐西郡	勢州阿濃津ノ城主	関原ノ役ニ石田三成	布施善太郎ハ	竹森岩見貞幸寛永一五年	上杉彌五郎義春	越後村上ノ城主堀丹後守	古人ノ云城ノ受取渡ハ	元和五年福島左衛門大夫正則	宇喜田中納言秀家ノ家臣	黒田美作物語ニ	長政ノ家来黒田美作	花房助兵衛	岡野左内	ケヤウライシ	大中新右衛門	飯尾甚大夫安信	項目

94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
57	56	56	55	55	54	54	54	53	52	51	51	51	50	49	48	48	48	47
慶長十四年二月中旬	加藤肥後守清正領国ヨリ	或曰信長公ノ叡山ヲ	山脇源大夫重信ハ	秀吉公信長公ノ使トシテ	信長放鷹ニ	板倉内膳正重矩	或ノ曰謙信一生	板倉周防守重宗	紀伊大納言頼宣卿	羅山林氏ハ	石田治部少輔三成	上田宗古ハ浅野家ノ長臣	金子惣左衛門乗馬ノ芸	松平武蔵守利隆	松川合戦ニ政宗ノ軍兵	天正五年黒田孝高	木村長門守重政カ与力	直江山城守兼続ハ

112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	No.
64	64	64	63	63	63	62	62	61	61	61	60	60	60	59	58	58	57	頁
小田原ノ役ニ九鬼大隅守喜隆	尾張ノ小松原ト云邑ニ	秀吉島津家ノ不廷不義ヲ	天正十三年秀吉千石権兵衛	柴田角兵衛カ南都ノ宅辺ニ	南都ノ奉行中坊飛騨守	信雄秀吉和議調ヒ	信雄ト秀吉ト相戦フ時	柴田勝家佐久間盛政	秀吉中川瀬兵衛清秀	天正十一年志津嵩戦ヒ	天正十一年正月秀吉	源君ハ堺ニ御坐アリテ	穴山梅雪ハ信玄ノ婿ナリ	信長本願寺門跡光佐	味方原ノ戦ヒハ	今川氏真国ヲ失ヒ	久野四兵衛	項目

131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113
75	74	73	73	73	71	71	70	69	69	68	67	67	67	67	66	66	65	65
天文ノ比細川右京大夫晴元	大永之比細川武蔵守高国入道	澄元ノ武將池田三郎五郎	細川澄元細川高国管領ノ礼ヲ	豊後白杵ニ吉田一祐	後藤又兵衛基次カ父新左衛門	豊後ノ佐伯太郎惟定	戸次道雪	佐伯紀伊守惟教ノ一城ヲ攻ル時	杉山主水ハ竹中半兵衛従母弟也	大友義鎮ノ五家老	天文年中ニ大友義鑑ノ臣	志津嵩ノ三振太刀	志津嵩ノ戦ヒニ盛政敗ルヽニ	大坂ノ冬陣ニ九鬼長門守守隆	関白秀次二十八歳文禄三年	朝鮮ヲ伐ツ時九鬼大隅守	伊達左京大夫正宗	北条氏政請降リテ

149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	No.
89	86	86	86	86	85	84	84	83	82	80	79	79	78	78	77	76	76	頁
備前宰相秀家ノ従士馬場与平次	宇喜田大和守ハ	元龜二年五月十二日長島合戦ニ	松倉豊後守重政千許ノ備ニテ	黒田如水大友ト戦フ時	常陸柏原ノ砦ヲ攻ル時	菅和泉正利幼名孫次後六之助	加賀中納言利常ノ臣不破彦三	天文三年芸州吉田釜ヶ淵ニ	中村式部少輔一氏之従者	丹後宮津ノ城主京極丹後守	松平筑前守忠之二家士林田左文	前田慶次郎利大ハ	由井正雪ハ	石田治部小輔三成ハ	秀吉島津ヲ伐ツトキ	池田三左衛門尉輝政ノ家臣	野村太郎兵衛祐勝	項目

168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150
100	100	99	99	99	98	98	96	96	95	95	95	94	94	93	92	92	91	90
石谷長門入道	池田光政朝臣ノ長臣土倉市正	栗山備後利安	朝鮮ノ平安川	正利カニ男吉田又助重成	別所家ニアル人首供養ヲ	黒田孝高播州姫路ノ城ニ	熊沢次郎八伯継	前田利家其臣奥村助右衛門ヲ	日本朝鮮和議調ヒ	京極若狭守忠高	三州岡崎ノ城主水野監物忠善	関ヶ原ノ乱ニ堀雅樂助直清	加藤清正股肱ノ臣庄林隼人	南条元宅ハ肥後ノ郷士ニテ	長久手ノ役ニ池田勝人其	長久手ノ役ニ池田勝人同紀伊守	池田輝政ノ家老先祖ヨリ	島原賊徒一乱ニ

表Ⅲ 乙彦コメント項目

冊	No.	記事冒頭	本文	本文量	コメント量
①	3	源輝政朝臣	四オ～六オ	一丁五行	一丁八行
	6	吉岡憲法	七ウ～一〇ウ	一丁八行	二丁一四行
	7	長東大蔵大輔正家	一〇ウ～一四ウ	一丁九行	二丁一五行
②	8	越後高田ノ城主松平越後守	一四ウ～一六オ	一丁六行	一行
	11	堀田加賀守正盛ガ兒扈從花木大膳	一オ～二オ	一丁三行	欄外書入
	13	松平左衛門督忠継	三オ～四ウ	一丁一九行	行間朱書
③	19	金子惣左衛門乗馬ノ芸ヲ	二オ～五オ	一丁一二行	一丁一〇行
	23	山脇源大夫重信ハ	七オ～七ウ	八行	一行
	25	加藤肥後守清正領国ヨリ	八オ～九ウ	一丁七行	五行
④	28	織田信長本願寺門跡	一一オ―一四オ	一丁六行	一丁三二行
	30	柴田勝家佐久間盛政カ敗ヲ聞ケトモ	一四ウ～一五ウ	一二行	一二行
	43	大友義鎮ノ五家老	八ウ～九ウ	一四行	一三行
⑤	45	後藤又兵衛基次カ父新左衛門ハ	一〇ウ～一二オ	一丁四行	一二行
	49	大永ノ比細川武蔵守高国入道	一オ～四オ	一丁五行	一丁八行
	50	野村太郎兵衛祐勝	四オ～四ウ	一行	二行
⑥	58	天文三年芸州吉田釜ヶ淵ニ	三オ～六ウ	一丁八行	二丁八行

の『志士清談』筆写は中絶することとなった。そして、その掉尾を飾る記事が武辺話とは無縁の水虎考証だったことは、武辺話集成である『志士清談』への乙彦の興味が薄れてしまったことを如実に示す証左のようにも思われるのである。

- (1) 検索によって知られる『志士清談』の写本は一二種であり(第一節注(7)参照)、これはそれほど多い残存数ではないと考えられる。
- (2) 本作については、拙稿「明治七年刊の『繁昌記物』をめぐって——服部撫松・萩原乙彦・高見沢茂——」上・下『文芸研究』一三七△二〇一九・二〇一九・二〇一九△二〇一九・九)に詳論した。
- (3) 石川巖『東京開化繁昌誌』解題一一頁(『明治文化全集』第二〇巻「風俗篇」日本評論社 一九九二・一〇)。
- (4) M・ヴェーバーは、儒教を文書の教養を備えた現世的・合理主義的な受祿者層の身分倫理の大系と捉えているが(大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』(みすず書房 一九九二・一〇)、これは江戸時代の教養人全般の特徴でもあろう)。

おわりに

私は先に、乙彦が『志士清談』を筆写した動機として、旗本武士だった自らの自己確認、あるいは、武士階級への追懐があったのではないかと述べておいた。それに加えて、もうひとつの動機について別の側面から触れておきたい。

それは『志士清談』が写本で伝わっていたことに関わっている。これが刊本として広く行われていた『武將感状記』だったならば、乙彦はそれを読んだにしても、ことさらこれを書き写してコメントを加えることはしなかっただろう。つまり、乙彦が『志士清談』に惹かれたのは、それが写本であり「熊沢先生遺稿」であるという、ある種の希少性に惹かれてのことだったろうということである。

乙彦は確かに筆まめであり、また、知的好奇心も旺盛だった。視野も広く、鶴峯^{しげのぶ}戊申(一七八八—一八五九)の塾に通ったり、ペリー来航の翌年には『万国旗鑑』(自家蔵版、嘉永七年刊(一八五四))のような国旗本を刊行もしている。一方、乙彦は一時期、歌沢節師匠小蝶

と同棲しており、その時期には端唄本を多く出し、「隆興堂」とも名乗っていた。「隆興」とは「流行」であり「興隆」であつたろう。また、乙彦は明治初頭に日本で最初の俳諧雑誌を出し、太陽暦に基づく初めての歳時記も編んでいる。つまり、乙彦は知的好奇心に富むと同時に、時勢に敏感なジャーナリストイックな感覚も有していたのである。

しかし、そのいづれもが片手間仕事の印象を免れない。その原因は、乙彦が旗本武士という身分意識を保持したままだったことにあると私は思う。乙彦は通人であり洒落者ではあつたが、それは「成り下がり者」としての仕業である。その根底には抜きがたく選良意識もしくは身分意識が底流していた。もちろん、私はそれを非難しているのではない。歴史的に染みついた身分意識はそう簡単に払拭できるものではなかつただろう。また、その意識が乙彦の著作に啓蒙色を強める原因でもあつたと私は考える。

それは漢字・漢語知識をことさらに開陳しようとする態度によく現れている。石川巖は、乙彦『東京開化繁昌誌』初二編の解題で、乙彦の文章を、

かゝる晦渋な難文はあまりその例を見ない。加ふるに怪奇な熟字が至る所列をなしてゐて、若しこれにルビがなかつたならば、現代には読める人があるかどうか疑わしい。

と評している^⑤。つまりは術学趣味だが、この漢字・漢語知識が乙彦のプライドの源泉ともなっていたのだろう。三田村鳶魚は、やはり明治初期の乙彦について、

明治八九年の交に『花語新聞』『雅俗新聞』『日新録』等の琉球紙刷の雑誌は、乙彦先生の名で売れるのであつた。

と評している^⑥。この「乙彦先生」には揶揄的含みはあるが、しかし、乙彦の一面を言い当てている。乙彦が『志士清談』を筆写したのも、人のあまり知らない写本を筆写しコメントを加えるという作業に、「先生」らしい喜びを感じていたからであらう。ただそれは、系統だった探求ではなく、その時々乙彦の興味関心から発していたのである。これは乙彦の他の仕事にも通ずるところだが、乙彦は色々思いつきはするものの、その仕事は

持続性に欠ける。それは、『志士清談』筆写が未完成であることにも、はしなくも現れている。

乙彦は器用人ではあったが、しかし、結局は「行くところとして不可ならざるはなし」とも言うべき生涯を送ったように見える。私は『志士清談』を筆写する乙彦の姿を想像すると、何とはなしにも悲しいような気持ちもしてくるのである。

(7) 乙彦の仕事の概略は、注(1)前掲拙稿に触れておいた。

- (1) 拙稿「萩原乙彦研究序説」〔『文芸研究』一一二・二〇一〇・九〕。
- (2) 拙稿「四方梅彦について——訂正・補遺——」〔『文芸研究』一〇一号 二〇〇七・三〕、および、同「幕末期「万国旗本」をめぐる人々」〔『文芸研究』一一九 二〇一三・三三〕。
- (3) 拙稿「萩原乙彦の人物像——二人の女をめぐる——」〔『文芸研究』一一三 二〇一一・三三〕。
- (4) 拙稿「萩原乙彦の俳諧活動について」〔『文芸研究』一一五 二〇一一・一〇〕。
- (5) 第三節注(2)前掲書、一一頁。
- (6) 三田村鳶魚「根津宮永町」一四八頁(「はじめに」注(4)前掲書)。なお、鳶魚の評中にある「花謡新聞」は乙彦と無関係で、鳶魚の誤りである。それについては拙稿『華謡新聞』をめぐる「『文芸研究』一四〇 二〇二〇・二一)を参照されたい。

志士清談卷之弍

熊澤先生遺稿

白峰萩原乙彦神録



○石谷士入ノ終工心ノ意ノ清潔久事

○石谷長門入道士入也平生倏約ナリ嘗テ袖日暮歸不几浪

人教十人アリ必不後板ヲ羞メ席ヲ同レテ清談ス既ニ鳥

厚ノ役ニ 公命ヲ兼テ肥州ニ下リテ印アリ其後ヲ嘗其

礼ヲ忘レズ士ヲ愛撫シテ不虞ノ備ニ懈ラズ郡制邦君ノ

人盤ト謂ベシ士入平生人ニ對レテ曰ク武士ノ心ハ常ニ

清潔タルベシト也這言是ニ然リ

○天野三郎六衛廉景川天野遠景ノ苗裔ニシテ百貫ノ地ヲ

○養學多便之命ヲ信シテ彼ヲ持ス

○東鑑以承曰年古
十八日海日出東時序
可為難色長之昔難色
朝夕祖儀難色等難有難

○代信小納言の字は
又陸奥又二島人所
難をナリ

見物ナスかキハ人々れは
書様うふ合歌ニ等レキ行状ナレ

外メラレテ順ハ理百シヤ難ニ卑職ナリ此高日難
任ナリ乳ハ乳ヲ重レ致フニ且難色ノ称ハ合義解ナリ

職原抄ニ見ル所ノ難色アリ
公武清家ニ難色ト呼者ナリヲ就中氏底ノ同ノ難色

ト云ハ思儀ノ近習ニテ珍式スクレタル者也義任ノ
思ニ事思ニテ大重盛ノ主馬堂久此也ナハ我家ニ

此称無キト雖也如此古史ヲ知ラ不審武堂ニ於テム
ナリ

ナリ

ナリ

ナリ

ナリ

ナリ

ナリ

以の厭狂者然ラナリ
持テアリ瓦扇ナリ
思ハレテナリ云未熟
ナリ

ナリ